



録

編

壹

~ 13

3567

1



門 13  
號 3567  
卷 1

柳田大學圖書館  
34.6.3  
藏書



美少年錄第一輯序  
其常任。初。世。世。乘。風。雲。之。會。而。得。其  
嗣。而。為。一。方。屏。翰。者。為。不。妙。矣。昔。者。周。陽。有  
大。內。氏。為。其。先。出。於。百。濟。國。王。東。明。八。世。孫。  
王。餘。璋。第。三。子。琳。聖。天。朝。推。古。天。皇。即  
位。一。十。九。年。琳。聖。避。唐。兵。之。亂。投。化。而。處。于  
周。陽。州。佐。波。郡。多。多。良。濱。回。賜。姓。多。多。良。呂。  
王。子。七。世。孫。多。多。良。呂。正。恒。稱。大。內。氏。又。數

美少年錄第一輯序  
壹

生亦至。朱雀朝有大內藤根者。藤根十世孫備盛。壽永役從東軍。所有功焉。因任大內。分當時與。其年三滿。當推俱。謂之元功。四人既為榮。備盛安孫。周防權。亦重弘。補於六。彼羅評定。眾重弘孫弘立。法名道階。自元弘。是武擾亂。從事足利成。依功為周長。有。三州。與山名氏。清獻。獲其首。相國道義。嘉之。賜。豐前及。紀伊和泉。與舊封三州。併管領六州。

威名自是盛也。應永六年。義弘以佐界反。將。擊。率。格。軍。敗。見。誅。其子持世遁去。隱于周防。山口。相國則削豐紀泉三州。與之。於。有。功。各。且。使。義。弘。弟。盛。見。繼。其。家。持。立。亦。會。赦。事。得。散。數。年。之。後。盛。見。請。持。立。為。嗣。相。國。可。也。持。立。世。生。教。弘。教。弘。生。政。弘。政。弘。生。義。興。義。興。輔。佐。將。軍。慧。林。公。還。於。京。師。其。忠。且。有。功。如。五。霸。一。般。由。茲。除。三。任。補。管。領。時。為。周。長。豐。前。及。山。城。七。州。守。在。京。八。年。財。用。不。足。辭。

美少...

...

而歸。城防。又數年而竟。義興。生義隆。義隆暗  
弱。不思民之憂苦。豪奢。非節。以富貴自負。於  
是孫其臣陶晴賢所殺。國竟亡矣。子一日縑  
軍。讀。讀而至。義隆滅亡條下。未嘗掩卷不浩  
嘆也。蓋義隆雖暗弱。然非有桀紂之惡。且封  
疆之廣。豈無一箇比干耶。而其身殂于斧鉞。  
七州瓦解。亦以然。吾何也。位高德寡。惟簿不  
脩。親愛佞人。是引禍發。自蕭牆之內。亦宜  
乎。乃者書賈文翁。軒。揣刻。又做子者編。子意

在前條。即便。繩。次。興隆。二。走。事蹟。及。美。惡。少。  
東列傳。以。憲。責。皆。是。寓言。引。勸。懲。意。近。類。似。  
唐山小說。寓言。小說。君子不取也。譬之春華  
驢目。觀。華。銷。日。寔。無。益。也。然。可。醫。鬱。憤。悶。焉。  
是。春。亦。有。然。君子。引。此。破。獨。坐。睡。魔。夢。昧。以  
此。為。迷。律。一。後。則。勝。於。不。見。之。歟。本。輯。方。成。  
書。覽。又。求。序。朋。管。之。際。思。出。于。此。遂。是。為。序。  
文。政。十。一。年。暢。月。之。吉。曲。亭。蟬。史。撰。

美少年傳第二輯卷一

二十九年

雲不道人書



近世說美少年録第一輯摠目錄

每輯五卷  
綉像擇工

卷第一

第一回

拒諫管領陣古廟  
驚屯水火懲驕將  
脫窮厄弘元宿漁家  
辨理亂它六資梭士

卷第二

第二回

突賊巢弘元捕連盈  
燒蛇穴義興遺禍胎  
御廟野興房遇阿夏  
鴨河原兩情結春慶

卷第三

第三回

綠巽亭蛇孽馮胎  
千杖畛兇徒喪命

卷第四

第四回

密使茶店傳貴翰  
美婦携子送情人

卷第五

第五回

神僧詠歌示解脫  
阿夏定計雪舊怨

卷第六

第六回

駿馬臨流全母子  
美玉做奴留孤容

卷第七

第七回

關帝廟少年結義  
富邨幼女惜別

起正六年盡大永二年  
年序大約係于一十四年

第一輯摠目錄完

肩功勿驕

禍福

依汝

數雖

未殫

須問炊黍



大内義興

像替第一

中成弘元

河原元

像替第二

後井筒

以心

五口持

七五三

力柱を

後

口口口



子自素古六

美以津鏡第二卷一

美以津鏡第二卷一

笠屋夏

美哉瀬十  
郎  
避雨遇歌  
妓  
蛇孽有縁

胎  
遂生彼虎  
兇

谷河平  
乃不中  
石乃  
落年魚  
かほろくろく  
まをたろ乃山

密回

陶瀬十郎

像替第二

像替第四

音吟

水夏

未松木偶双



喪家狂犬網裏  
惡魚以毒征毒  
天刑妙歟



十々鬼夜行太

野千五黒三

像替第五



日高景市

うぬを羨

あつちの

あつちの

あつちの

あつちの

あつちの

あつちの



重出

未松森之

就鳥津能作

像替第六



近屬院本雜劇小載と美少年と稱するもの梅稚愛護茶之助吉  
三多の類小過を云ふは眉目美少年の直美少年ありて美の醜の  
對惡の善の偶然れ世に美少年あり又惡少年ありと云ふは美の  
るや眉目の美あり又醜の美あり惡の亦相貌の醜惡あり心術の醜惡あり  
醜惡の容貌美麗といふもの性毒惡するもの惡少年といふもの又容止ら  
醜惡もその性の美よりいふもの美少年とこれをいふ況性と容止と共に善美なる  
もの良真の美少年ありと云ふは書名の親の美あり性と美あり少年  
傳を作りし後性と容止と美なる少年傳をいふ言とは是則善美ありと云ふ  
醜惡なるといふもの書名所云美少年の末松就鳥津日高等の少年の  
事小似くそのあめあめ作者の用心敷輯を累て漸々中に見るべき其  
所まで至らぬ程小看官と感んるとを聊か小注を贅くこのところを書つたは免

近世説美少年録第一輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 諫を拒ぐ管領古廟の陣を

此を驚て水火驕將を懲む  
將軍重任の時周防長門  
豊前筑前安藝石見山城七箇國の守護ありけ。大内左京權大夫ヨウ  
良も興復の功あり。先代の例もある。管領職を補せられ。その  
身京師に在り。執權政務一家に歸し。威勢高く時をた。時永正六  
年己巳の春の比南朝の大將。菊池武政が嫡男肥後守武朝が殘黨は  
菊池肥後太郎武俊と喚ぶ。先亡の餘類を鳩め。肥後國阿蘇郡阿蘇  
山の古城を籠て。近御郡を劫。北に猛威を振ふ。鎮西の守護



志く恙なく日るるに平愈すく之件ついでの賊亦遺るあきら當坐あつ伏誅あつけき  
 本人定まる所までも今更だ武後が刺客をも知るべからず渠と討た大将の  
 其任は勝るものぞ擇ませんもの願ねがく之を以ては衆皆諾うなむ其亦が  
 多しよもその外はゆたくと志て御氣色を伺うかがひ義植頻しばしばり領うけとる  
 大将を甲乙と擇む及ぶ當管領左京北を以て中國七州の大諸侯勇小  
 志く且武略あり大功空あきらからざるよの世の人の知所逆徒追討の摠大将の  
 京兆けいちょうる誰たれの今と政勢は暇いとま身みのそ大義たいぎよとてなれど周防の  
 立たてりく近國の躬方を駈か催もよほし一軍孤城を攻落あつかし武後が首と獲とる  
 正更小踵ただしを旋まわるるを偏ひとへ頼たのむと他事ほかもる仰おほせ義興ぎきう推辞おし由よしり  
 畏おそるを稟まうしける有斯あり而次なりの日義興ぎきう將軍せんのち旗はたと軍兵ぐんべい催もよほ促せまる御教  
 書あきとめつる猛あま小帰國きこくの准備じゆんびと整ととのへ隊兵たいへい三千餘騎さんぜんじゆをゆる京師きやうしとゆる  
 草枕くさまくら旅路りよ小幾日あま在明あの月毛つきげの駒こまも西天さいてんもくても只管ただ急いそぎいそぎいそる如月の  
 下濟かさい周防しゆほう州しゆ吉敷よしか郡ぐん山口やまぐちの城しろより来る御教書ごきょうしょとて筑紫ちくしも御方ごほうの武  
 志しを催促さいそくせし西國さいこくの大小たうせう名な大伴おほ備前びぜん守親しゆしん春はる太宰たいざい新あらた小貳せ教しやう頼たの原はら山やま  
 鹿か宇う佐さ千手せんじゆ宗むね像ざう酒しゆ殿てん立た石いし等ら各々かくかく隊兵たいへいを引率いんそつしと日るる志し来會らいあ  
 けれい義興ぎきうが七州しちしゅうの士率しそつと共とも五ご方ほう餘騎じゆ肥後ひご國くに小推寄せうしゆき阿蘇山あそ道みちもり小  
 たりなり是こゝより先さき小義興せうぎきうと西國さいこくの間謀者まのひのめとて敵てきの分野ぶんげんを撈らせし小の者もの躬こまく  
 たりたり志しも阿蘇山あその古城こじやうより籠かこむる賊徒せうと一千餘せんじゆ二千にせん過とりて志しもるあねも  
 武後ぶごへ此こゝも怖おそる氣色きしきも敵てき推寄しゆき一いつ箭や射いんとて鏃やぶを磨ある防戦ぼうせんの准備じゆんび  
 暇いとまもくいと報うを義興ぎきううち告つぐ原來もと必かならずさるは武後武勇ぶごぶゆうの癖くせ者もの  
 とも繞めぐり鳥合とりあひの兵へいも京軍きやうぐん数方すうほうの精兵しやうへいと雌雄めいじゆうを争あんと欲ほむ彼精かのしやう備び海うみ  
 墳ふめ蟻あ蟬せみが谷やとて車くるま小逆せうは異ちがふ賊せう小勢せうの附つぬ間ま小大軍おほ山の三方さんほうより

攻登り踏潰さん。いづれ長途の疲勞もあらず。今宵は是首小人馬と想へて曉を  
 齊一俟んとす。躬方の諸陣小御示ら。阿蘇沼の畔る靈蛇の神社と掃帚と。  
 本陣もあつた。不題安藝州高安郡治比の御の人氏小備中次大江弘元と  
 以て武士ありけり。遠くその祖を原も。鎌倉の將軍頼朝卿の時政所の別當あり。  
 前陸奥守大江廣元の四男安藝入秀元十一代の衣筒孫なり。寔は名たる世  
 家なれども。總小一千貫の御士少く。大内氏の隊は属され。這回義直の權使は後宅  
 主後太の陣中よりあり。弘元文武の才長く。且嚴嶋の辨才天を年来の信者なり。  
 けれど今義直が阿蘇沼の靈蛇の神社を本陣せし。下知を告ぐ。諫るや。  
 當社の菊池武光が時初この地小建立して嚴嶋の神を合祭せし。靈驗筑  
 紫を隠れり。其某曾故老の物語は。初武光阿蘇山城郭を執立ん  
 とく。屢繩張美されども。彼山の麓に阿蘇の神の祟あり。山は硫黄燃出く。  
 常小煙の絶ると。信濃の浅間山嶽日向の霧嶋山と相似る。其の故は武光が欲  
 せ城の硫黄の爲に幾回とく。焼崩されて成就する。さういふ。困果と  
 誰れもあれ。彼城の繩張とく。定め。落成せむ。のわが賞禄へ乞ふ。依べと  
 送る限り。有斯程。同岡山鹿郡木山村小浮木と喚ぶ。媪ありけり。故郷  
 安藝の廣嶋中。最におよ。宮嶋の辨才天を信者。と大々。過され。過世す  
 くて良人。後れ獨子。さへ先。そと。此の由縁。心當小件の邸小  
 流。朶。日。母。小。木。山。川。下。立。々。人。の。被。雀。目。下。衣。を。洗。ふ。を。生。活。ゆ。と。多。有。一。日。彼  
 川の上。大。死。る。一。箇。の。卵。の。草。上。最。陰。小。あり。け。り。心。も。多。見。出。け。り。拾。ひ。て。宿。所。の。之  
 破。れ。一。箇。の。赤。子。の。生。れ。小。り。あ。は。れ。り。と。も。覺。ね。且。駭。且。憐。と。く。七。字。育。は  
 程。は。半。年。許。あ。り。と。の。子。の。大。な。り。ま。り。七。八。歳。の。童。子。は。優。り。あ。を。り。七。隣

村近御塚を隔一田舎まで傳はる事とて日々不觀るの堵の如く原是卵の中より  
 多く生出る子とありければ玉五郎と名づけり俚語は卵を名つけると至子ともいふ事  
 遠く唐山の故事とあり帝學の少妃簡狄の春玄鳥の卵を吞み契を生ずる事  
 れどこれをも倍々と怪しむと村学究の吟詠を浮木人物とも思ふ事とて肩慈む情を感  
 ずる玉五郎は浮木といふ事と過世ありて死すまで小養育の恩いと高き何ぞと報へん  
 傳はるる菊地殿の阿蘇山城成就せむと彼山に繩張りて後成せむる事あり  
 賞禄の請ふ事とてと徇られる事とありこれの支をよとて死す居る事と貴財成  
 獲る一期を優に送りて事とあり此の由と訴へて死す事と急を浮木の媼が今ゆふ心  
 の事とありとも要ありとあり菊地が城を越せんと武光も亦疑はる事と益  
 る事とありと事とあり媼が月より養ふ事と子玉五郎の怪談と傳はる事とあり且  
 試み小請ふ事と功成らる形の如く賞禄を取せんとあり浮木の媼は宿

所小退り玉五郎は首尾を報へ然るに灰を囊小装を推し共侶阿蘇山は  
 赴く急せむと杖掖と郡を隔一路の程と只一日小走の苦を高峰さる事  
 易らば浮木を脊肩して攀陞する疾走と馬も如き有之而山巔小近はく  
 隨小玉五郎の山は高煙と信と擔仰る要時咒文を唱る程は惟む昔より  
 一日も絶ぬ山の猛火の立地小滅失せ煙も立たぬ事と登時玉五郎は浮木の媼を  
 見えぬ慈善の人と見え前世の悪報中つ天を喪ひ子と先そと孤獨の  
 老女とありこれ業因を多し彈之餘命安楽事と事と死し神佛小擬  
 せられ水く祀らる徳ありけふ事と尚ある事とあり青水の比鎮  
 西のその名皆え尾形三郎惟義が庶流の末孫と尾形の大蛇の子孫と報大  
 因とありこれ縁を字育り又辨天を信する事と縁を子あり親子の契  
 事とあり今より長く別れり事と本形を顯す事と必る怕れぬ事と後不



長崎藩

十一

白丁城

之木



三五

白蛇靈迹

白蛇

跟く。裏の灰を揮布する。あつらふ繩張成人。元身のおまの城郭を成就せしむ。  
 のはらへ阿蘇の社頭。神泉を引れば。あまの山と楠木野の間。廣死沼を徹し。彼神。  
 これを進み。これの邊に栖んと欲む。とて。身を翻して。隨ふ。公母あり。あ。  
 白蛇と變りて。山の平坦。嶮岨。後ひ伸の屈る。政すけ。豫て期。事なま。あ。  
 浮木の戦く。曾を鎮め。教誨の。跡。跟く。推。方。け。裏の灰を。彼此と。故。  
 布く。小大蛇の。涎沫の。粘。著。けん。灰の。地上。小凝。る。似。く。後。多。も。能。き。け。り。  
 既。ま。き。城郭の。繩張。早。ま。成。く。白蛇の。浮木。を。く。く。別。を。井。口。面。色。考。る。忽。  
 然。と。と。雲。を。起。林。麓。の。方。に。飛。去。く。野。中。の。古。井。に。入。る。と。を。え。か。その。井。の。四。下。十。  
 町。大。地。陥。り。沼。と。多。く。の。深。を。測。る。へ。く。形。様。琵琶。似。れ。ぬ。と。く。里。人。琵琶。の。  
 沼。と。唱。へ。又。阿蘇。沼。と。も。喚。做。く。然。程。は。昔。阿蘇。山。の。浮。木。の。再。度。の。計。も。も。を。  
 靈蛇の。奇特。を。感。悟。し。く。繩。張。に。後。ひ。阿蘇。山。の。城。を。造。り。林。麓。の。神。の。

祟もく。山の煙を絶はれぬ。隨ふ。成就せり。武光既。足。り。浮木の。  
 媼。二十町の。良田。と。沙。金。千。兩。を。取。り。浮木の。口。の。金。を。受。く。田。圃。の。辞。ひ。く。  
 これを受。む。金。を。郵。長。に。預。措。く。貧。者。に。施。す。或。里。の。路。を。造。り。橋。を。作。り。  
 る。ま。程。の。三。輪。に。及。び。く。の。金。の。餘。り。を。比。浮。木。の。病。を。治。し。て。睡。ぼ。が。  
 ごと。身。ま。り。けり。登。時。郵。長。の。里。人。と。相。計。の。遠。く。浮。木。が。亡。骸。を。阿蘇。沼。の。  
 ほと。り。花。子。件。の。送。り。財。を。り。神。を。齊。祭。禊。倉。を。建。く。浮。木。の。辨。天。と。稱。へ。り。  
 是。より。武。光。の。戦。ふ。毎。に。必。利。あり。肥。前。肥。後。日。向。大。隅。薩。摩。の。書。意。を。討。  
 後。く。威。を。西。海。に。振。ふ。靈蛇の。擁。護。を。く。阿蘇。沼。の。畔。に。靈蛇の。社。を。  
 建。立。し。て。嚴。嶋。の。辨。才。天。を。合。し。祭。り。浮。木。の。禊。倉。を。末。社。と。す。その。子。武。政。が。  
 時。も。年。毎。の。祭。礼。懈。ま。ら。ぬ。奇。麗。社。觀。の。阿蘇。の。神。社。は。優。る。と。も。考。る。  
 登。し。て。武。政。が。兒。孫。不。至。り。神。を。敬。ふ。心。を。神。社。頽。破。及。び。ど。も。

修復しゆふくを加くわはるはりければ也や。彼家遂か衰おとろへく。零落れいらくするものはりの山やま々々。然しかしも。出いく煙のまとをめの如ごとくも。先せん蹤あともぬくも。靈蛇れいじやの神社しやを御陣ごちんとも。兵へいの乱妨らんぼうまを制せいめられしつも。由よし祈いの願ねがひも及およびますも。御ご陣ちんとも。他た所ところを移すも。敬けい神しんの美を表しめ。然しかしも。神かみの憎みも迫せまりし後ご悔くわいのゆひも。故こ事ことを速理すみとも。盡つくも。潜かづみ論たる。諫えい言げんの耳は逆ひ良茶りやの口は苦しとも。壁かべ言ことばの漏れを義ぎ與あら頭を左右さみぎふち掉おちり。大おほ江え殿との先せん祖そより和漢わんの故実じつを語るも。文ぶん武ぶの達者たつしやとも。似にひまるも。池いけが大蛇おほへびを出しし。愚ぐ民みんを惑はし。奸けん計けいるも。淫いん祠しを領するも。淫いん祠しの民は害ありし。賢けん官くわん循じゆん吏しの必毀くわいたりし。然しかしも。其そのの議及およびし。本ほん陣ちんは志するも。彼か早はや蠅せう鳴なり。邪じや神しんの僥幸きやうとも。正ただしきの正るも。喋せつ々々。人ひとを惑はし。火ひ鏡かみく窓めく。後ごのも。

諫えいめを。身みの陣所ちんじよは退死たいしも難くし。樂たのしくならばも。大おほ内うち氏うぢの七個なな國くにを領するも。分ぶん小せう過かだる。果は報ほうとも。例れいもも。管くわん領りやうまを升のぼすも。權けん威いを肩すも。諫えいを拒しし。横よこ紙しを破るも。たをたをしし。這この軍の功ありし。久ひさ後ごのありし。知しるも。催さい促そくは後ひし。悔くわいしし。今いまの甲斐ひとも。有ありし。右みぎ而して日ひの暮れ雨降あめとも。夜よの丑とも。比ひ疾はや風かぜ颯さつとも。阿あ蘇そ沼ぬまは集るも。水みづ鳥とりの群立た騷さわぐも。汀てい渚しよの陣小せう雜ざつ兵へいホを。燒や捨するも。篝かき火ひとも。滅め果はるも。寄よるも。軍ぐん兵へいの物音ぶつおんは驚覺おどろくも。罵のの散さん動うごけし。原はら來きた夜よ討うちの入るも。御ご代しろは呼ぶも。騎き馬ば武ぶ者しやの鞍馬あし又また鞭むちを揚ぐも。焦あせ燥そうありし。士し率しつの笠前かさを束ひし。敵てきの漫々まんざん。阿あ蘇そ沼ぬまの水逆さか立たてし。岸かた小せうれと陣ちん門もんを走るも。四よ下げまる。敵てきの漫々まんざん。阿あ蘇そ沼ぬまの水逆さか立たてし。岸かた小せう溢あふれし。陸りくを浸むも。沼ぬま水みづ猛もう突つ衝つくも。人ひと馬ばの足を拂ひし。勢せいひ當るも。



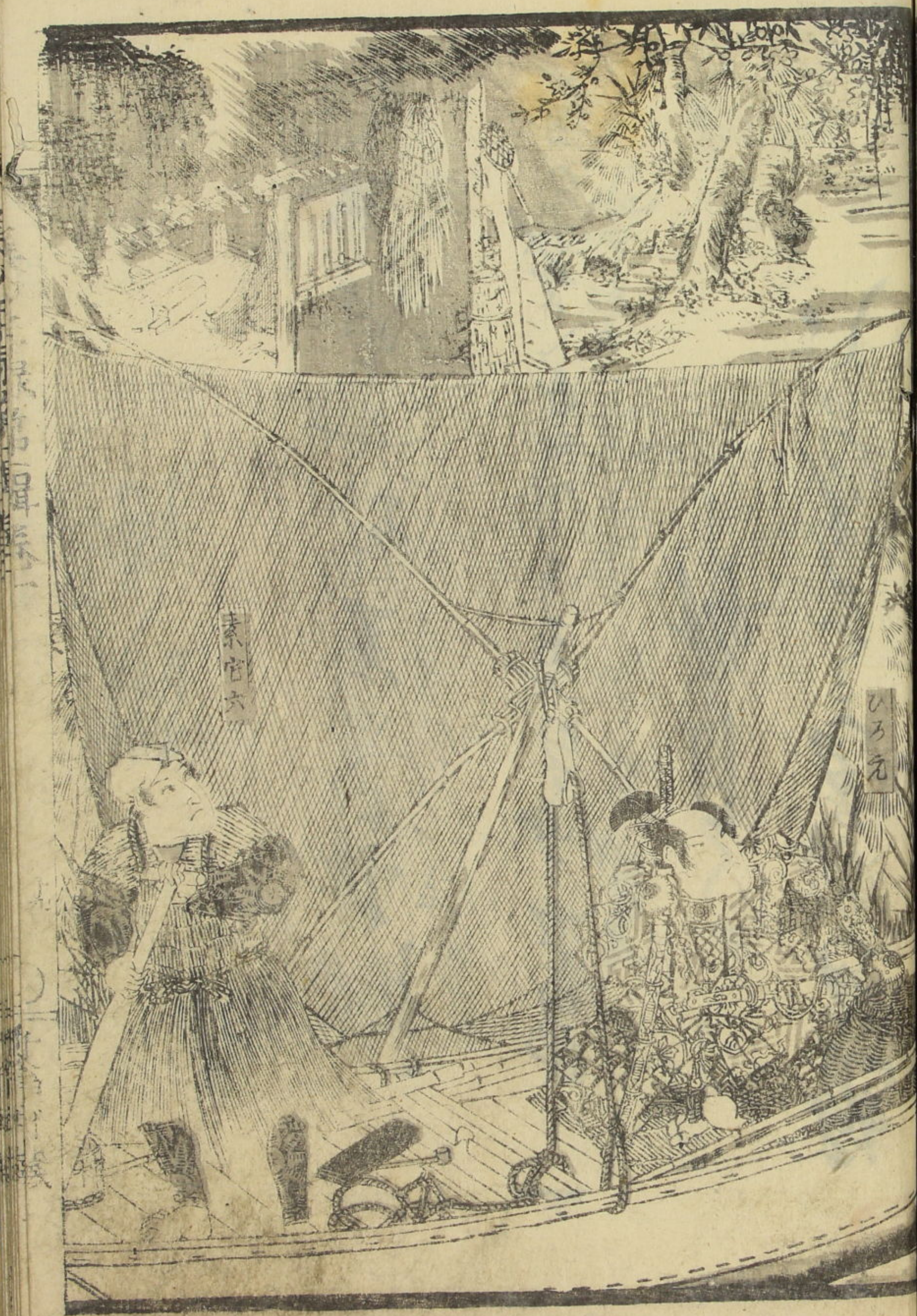
諸陣齊一避易あく矢庭は溺死するものいづくる工を志す幸とて脱る  
 のもら前を流し器械を失ひ固をくびく登らんとする如法暗夜のりや  
 あれが東西とも辨む主の弱るれども家隸これを極す由多く父と兄の流されても  
 この留んとる子弟もあらず瞬間小水岨の常小あざるありあり有阿蘇  
 沼の其処ともる吉田楯木野の是方より阿蘇山の麓まで大湖のわたりふ  
 けり有是ければ大將義興をゆえ大伴太宰の餘の諸おも辛く水厄成  
 免れ走退く三千里許小印記知取程天の朗々と明ふる言ふ見幕を失ひ  
 甲曹を脱捨く今ゆら絆を缺のまはる兵糧まみ出水に取れ大將も士卒も  
 餓ふ臨まぬのりければ義興即近御下知しく糧を送せ又阿蘇宮の大  
 宮司小兵糧を催促しく稍口腹を類小物ら備ゆる弊み兼く敵逆寄せのり  
 せん抑彼沼の水大く溢れり大水水及びの靈蛇の祟るるべ欲然と志す

脱るどの山崩れもやあざらん攻へ城まき寄もせ御方を親喪れ世の胡虜  
 るらんのと左も右もよの軍果敢々々々しむのあらとく咳くものるんヨヌりけは  
 かる騒ぎ二三日みる徒も過したる第三日の夜水小の渡りまく落場く故の  
 陸地より義興誘やあせん先陣後陣と部を定め名よあ高峰の麓  
 路より阿蘇山深く攻登り関を咄と賜る早雄の壮武者ホいと浅間が敗  
 城の前門より後門より堀を踰城戸を破て先陣齊一攻入りたるその甲斐のあら  
 びしく何の程小落亡けん敵一人もあまざる見へ甚麼とたろり小疑惑ふく立在  
 折る武俊ホが落ると死あらの地中小機関り措けん忽地山も烈衣る如く足  
 下は巖地地雷火を敷く小これ身を燻ましく吐嗟と騒ぐ大叫喚けらるる山小  
 硫黄の氣あれ四方八面猛火とろろ城の櫓小燃移る敵を避る違はれば城  
 戸より内小攻入り士卒のりよ四五百名一箇も脱るものろく灰燼とたり









素直六

ひろ元



おやめ

高野の  
漁舟  
載る  
而して

出像第二

美少年釣魚車巻





退けの。漢子の身邊途く侍りく。江湖上の雑談。姑く時を移さず。  
 弘元と又あつた對ひく。その大く疲労のけの日の暮るるも知らず。半日一夜  
 熟睡せし。これより鈍す。何と云ふ疑ふ似れぬ。あつた川添の  
 孤屋の。鄰家あり。昨夜真夜中比やあらん。背門の馬の嘶く。  
 人の相譚。声あつた。とつた。微笑く。現然ともあつた。背門の馬の嘶く。  
 網を織る。敗小屋の。前夜人馬の。声の。あつた。弘元の領元  
 遠ら。あつた。色あつた。又含笑く。只今且つ告す。あつた。  
 疑ふ。一河の流。他生の縁。危窮を。居亭儲の。管待の。身を。終は  
 まる。忘る。後。報。受。所。あ。再。會。為。姓  
 名。天。暗。水。大。落。陣。所。管。領。の

安不口を問へく。後率ホの存亡も心係りく不便。彼ホが往方も安不口  
 といふ。沈吟。現縁。千里も合壁縁。肝膽胡越。不測の値  
 偶。有。數。系。名。殘。惜。け。れ。も。く。て。後。々。小。み。つ。ら。時。得。り。の。ふ。し。あ。ら。ん。  
 かり。亭午の比。不慮。宿の仕。既。賢。察。志。あ。つ。て。賞  
 禄。望。素。一。匹。夫。で。ゆ。名。生。口。名。る。け。れ。も。世。人。名。つ。け。く。在  
 下。残。子。自。素。它。六。と。喚。做。し。妻。の。名。を。矮。女。と。い。ひ。子。共。も。夥。し。け。れ。彼。此。へ  
 巢。立。く。今。の。宿。所。の。ゆ。を。これ。ら。の。も。後。々。小。み。つ。ら。時。得。り。の。ふ。し。あ。ら。ん。  
 漫。人。の。生。告。ゆ。ひ。と。耳。に。示。せ。弘。元。の。名。を。親。を。更。め。く。つ。て。趣。あ。ら。ん。と。い。ふ。  
 和。主。と。生。れ。る。の。漢。者。の。あ。つ。た。時。に。遇。後。一。葉。舟。を。塵。を。避。て  
 暮。夜。先。を。包。む。の。欲。嘉。吉。應。仁。の。擾。乱。より。以。來。室。町。殿。の。武。威。行。れ。諸  
 侯。の。割。居。て。強。は。い。必。弱。を。征。し。上。下。交。利。を。取。れ。る。の。權。ま。く。下。に





是よりして清氏直常氏清義弘亦謀反しく君臣下刺上の戦ひ絶む録  
倉管領諸國の領主も亦の如くゆき終ら嘉吉忠仁の大乱は極り便  
是汝小生く汝返るのるはを前轍屢覆れども後車の誠を知らずこれを  
恨むも愚小生を然り思ひぬむと辭せり論され弘元頻り小嘆息して和  
主の宣小辯者之彼鄙食其魯仲連といふも加るとるはべり可惜しれ才を  
のく釣綱は老朽より良主と擇く仕より然る汲引をせぬとて素  
六頭を掉く在下仕官小望る一縦その望ありとも仇の為小逼られ夫婦が  
命運既小盡り後日と思ふは違ふといふ弘元敬馬をく安らぬるなり  
和主の仇何の七これ一臂の力を勤く救厄の恩小答へ隠せ告よりの小  
と向き素宅六嗟嘆小勝むを辱れ工ら大爺のけえ幾百人の助劍を  
ゆくりとも免れ果ては命小あらを是則命數るれ又奈何ともまらぬ

この条の  
論一  
部小説  
要領之  
結局は  
至るも  
め分  
るる

らより遠くを以合のふとあら在下夫婦を仇の為命果敢るなり  
ぬとも冤魂の生を易く必仇を復す一人の終焉の一念ゆき生を引くといふ  
理の輪回も善人の善く報ひ悪事小悪りく報ひこれ亦自然の理なり  
かれ在下の後身も甚麼事のものあらん是亦料り難かりし詳小説  
とて天機と漏まの怕れありみづろ悟りぬ人といふ弘元慰めく頭を  
低く黙然たり且く素宅六ら又弘元小うち對ひく大爺の中州の舊家  
多く且惻隱の心敷くよりの信すも祈らも神の擁護あり況く信心  
淡く糸の今をあれ後小至る必與るのあらん就く報もをせし一條あり  
這回阿蘇山の城攻へ一個の功もるはべり管領の美を比糶小羞く怒を程を  
正あらその禍誰うへ被るゝと志らねども未然の禍を避んぬその功を  
補ふ下就く當國山本郡飯田山の洞中へ川角頭太連盈といふ山賊あり

ちの菊地武俊が阿蘇山の古城に籠りて死。隣郡の野武者を招鳩る  
 と管へる。連盈則も下の賊徒五十餘名を従へて第一番小馳から其の隊に  
 属んと願ふ。武俊則集て首領を一方に守らせし。忽地心裏をく。城中の軍要  
 金銀百両を竊取く。下の小賊共侶に彼城を逐電せし。飯田山に立寄る。  
 今も件の山中あり大爺のより彼山へ潜る。推寄る川角領太と捕捕り。これを  
 管領に進む。其の功を補ふ功あり。疑ひなく。後ひる。と懇切に薦め  
 弘元を沈吟と。其の無難をもち。賊の主従五十餘名山。塞の籠る。と  
 己身の一箇中。捷を取ると難く。と。素宅六党介と笑く。その笑の心  
 安らげ。今よりあを立出。彼山へ赴る。中途中より。其の援助を  
 求めん。疑ふと。遂に功あり。せくと。ひる。身を取り。戸棚より。地圖一枚。残  
 とり出。これを弘元は示して。さう。この圖より。彼山へ。賊の巢穴の具あり。

弘元は。彼巢穴の北の。小脱穴あり。一方より攻め。捕逃せし。も。あ。を。を。  
 後兵を二隊に分ち。前後より攻入る。囊の物を取ると。易く。一箇も漏れ  
 たり。よく。と。説く。と。件の地圖を贈る。弘元は。心。を。ひる。  
 らも受取。この教諭。違ひ。思義。然る。報ん。り。も。死。夫。婦。の  
 命。且。夕。は。逼ると。皆く。を。哀。し。けれ。と。を。素。宅。六。推。林。等。と。も。益。も。た。死。秋。心  
 歎。け。這。田。大。爺。の。次。員。と。り。の。在。下。の。自。力。あり。も。六。の。年。來。信。の。神。の。冥。助。で  
 け。來。世。の。仇。と。る。と。も。必。る。怪。し。ひ。を。今。も。是。す。と。く。出。ぬ。と。其。薦。め。る。声  
 聞。え。ん。女。房。綾。女。の。庖。福。の。と。より。出。て。來。つ。何。と。も。草。葉。の。陰。乾。の  
 走。り。を。弘。元。に。贈。り。く。い。ま。う。り。中。途。め。く。饑。あり。この草葉を。舐。せ。ぬ。と。ん  
 ち。五。六。日。物。を。た。る。と。も。氣。力。い。く。健。る。ら。ん。と。示。せ。弘。元。受。と。り。て。送。る。力  
 る。惠。の。只。感。涙。の外。と。あ。ら。む。ゆ。ら。び。と。な。り。告。別。を。縁。頼。より。を。り。立。て。刀。を

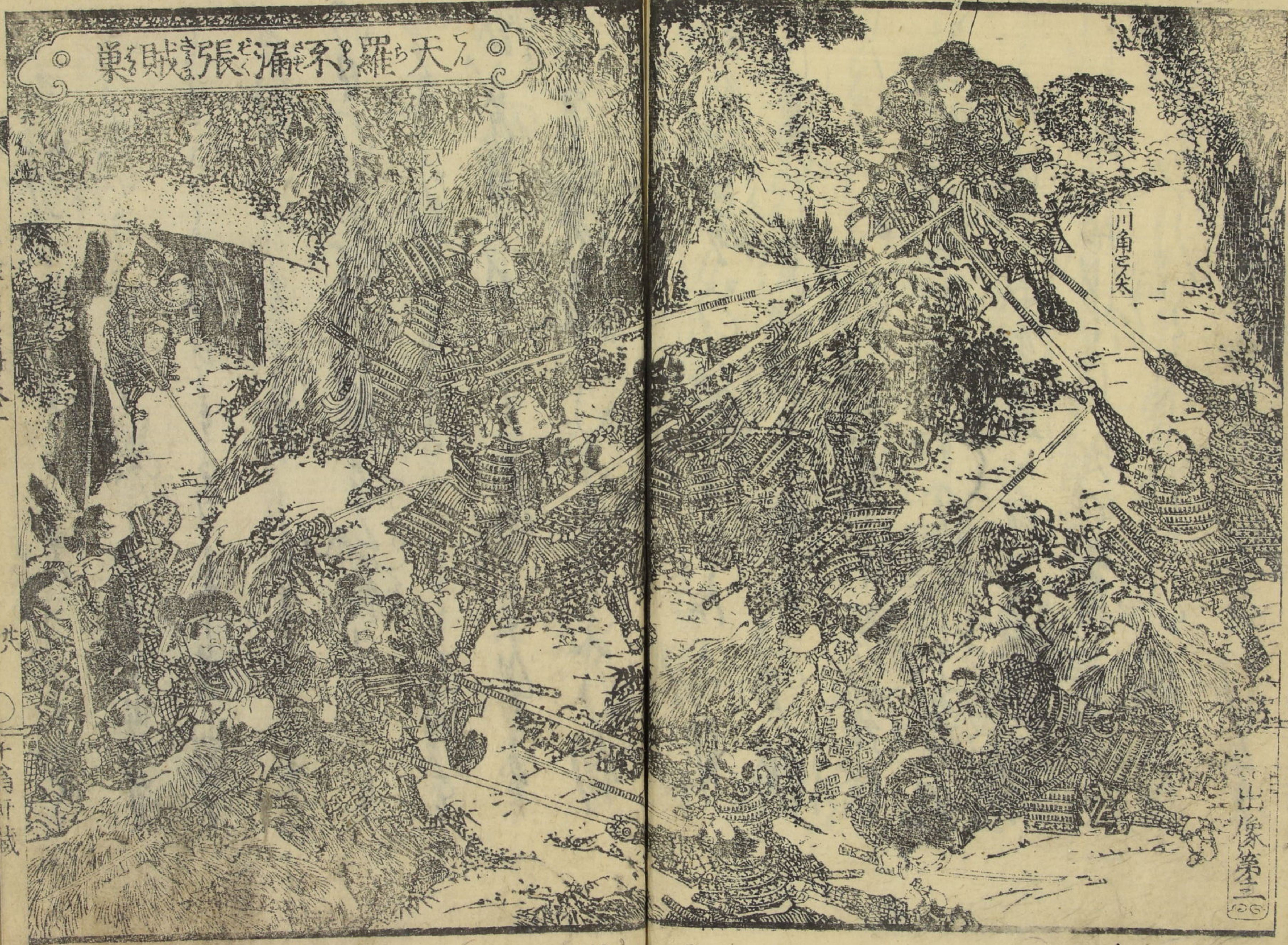
腰の草鞋の刃を締くゆるむけは名残をやとまろふ目送る夫婦の柴戸のほと  
 重要時立在り却説備中弘元素陀六が宿所をゆるゆくのさき  
 るまの路備より隊の軍兵二十餘名一人も恙なく馬を牽た兵器を横  
 佩く左右二側ついのわかれがと甚麽と駭馬に且然び且怪そ縛の趣を詰れ  
 衆皆齊一答さるる在下亦ら彼夜より沼水のおも推流され君の先途は  
 あひまらむ沈みせ折し誰とあらそ一箇の漢子快船を漕りて来り  
 在下中をけえん馬すも助け乗とそ宿所小漕久し扱潜舟ふ小まを  
 和殿亦且くあまあら主小再會まの然びあらん音るせと諷めて背の  
 小屋は容措なら生枯る草葉を二十餘枚取のてま和殿亦志をくれを  
 舐ら五六日の餓ざる馬も舐らせるといけりいと怪くらむひつうどの教の如  
 のせらる忽地心持清方と今に至るまで餓を覚む書ハ疲勞く睡り申

斐小昨夜の通宵のねられれ其れ主君あひなるよのあわんと憑りて心  
 勇のせらるるまらち相譚とゆひ一扱又けいさの程あ下の女房が走來り  
 殿亦志を竊小出く相距ると二町許辰口のくる若小君小再會  
 考ととせとせといひて小飲りて重要時もあるを教小任しあまらる候なれ  
 果て違つて恙なれ身をなまらるを嬉しけれと異口同音小報知まを弘元と  
 つくととら忽地意中に悟り原來昨夜北月門のく小人馬の声の夜をの汝亦  
 るま今知りぬれも彼漢者素陀六小拯れと彼処に在り縛の趣首をの  
 如此々々尾の箇様々々と送もる説正定を衆皆皆の呆るまをなほ  
 疑ひの釋さりけり登時弘元眉うち顰くゆるゆるも彼素陀六と素陀是の  
 あは術ありと主従の危難を知りて身を船のく救ひけんこれ因縁あるの  
 欲且治乱得失の理を論する才学言下は顯れ耳新しく覺る草葉を

りく主従小贈りく路次の割替小換へる計ひ意外小出く凡夫のよきま  
 後記あるるるむ少くを津小を鯉言の爲ま命旦夕小通りぬといひせむ異類あり  
 水泊水虎ると小やあらん然るる狐狸の種類放左も右もいと怪し吁奇  
 るはる形と歎賞しく後方遙小るれば今も有ける川の方の自屋ハ迹も  
 かく春の川風よりち靡非く岸の柳のいづら小人を招く小似りけり従率  
 亦この光景小駿嘆と舌を吐たひく奇異の思ひをみる中弘元の  
 空一から嚴嶋る辨才天の擁護利益と覺る今何を疑ふか  
 今や飯田山小赴き川角頓太連盈を捕捕るを緊要するれ故の  
 箇様々々と素衣六が贈正たる地圖を披ちく指示其衆皆有理と齊  
 悟りく歎ひ勇まて後ひけり如之而備中弘元ハ件の馬小ち跨正二十

餘名の後者をぬく飯田山は赴く小彼茶草の奇特るけん人馬共小饑る  
 とる氣力日る小十倍と長途るれども疲勞を覺む阿蘇の城攻の期小  
 後れどと此此小休るるを宵も終夜急死し幾日もある既に件  
 麓小著まけり這山高峯るる森ども樹木森林とて昏も暗く鳥路熊徑の  
 外小路も日れ弘元ハ復地圖を披ちく嶮岨方位を分別し心利る一箇の奴  
 隷を樵夫の貌を打扮しく潜中ふ山を登し賊の巢穴と張るる半日可小  
 考くつり末ら叔弘元小報るる件の川角連盈五十餘名の小賊と共小山中  
 なる洞の中小在りその洞いと廣く入り口も思宜る門戸ありその餘の爲体ハ  
 如此々々と仔細注進しくければ弘元糾るるを急びて二十餘名成二隊小  
 計策を具示しく前後より推寄まる弘元ハ後兵十餘名を洞の  
 後門の之小赴前前後より取籠て一箇も漏さずと計ひる表語不題川角

天羅河張賊巢



川角之矢

出像第三

天羅河張賊巢

共

千鳥可成

頃太連盈つらみろの曩なごの菊池武俊きくちぶしゆんが軍要金ぐんえうきんを竊取せうとく走はなりて舊日ふるひ果はて還かへりて  
 一隊いったいの軍ぐんより日々ひひ小多こおほ下の賊あしを聚あつめ酒さけを飲のみ飲のみありけるひ日ひ也なりひけるひ一隊いったいの軍ぐん  
 兵推寄へいすゐせまき賊首あしう連盈つらみろと出いよ京都きやうとの管領くわんりやう大内殿おほうちいん武俊ぶしゆん誅伐しゆはくの序ついで  
 次ついでどりの汝なんぢ亦また誅しゆせん為ため馬うまと山やまの麓ふもと寄よせぬ数万まほせんの官軍くわんぐん稻麻いなまの  
 ぞく四方よつはた八面はつめんと詰つめる天羅てんらと漏もえやとくく縛しばひの繩なはを受うけと喚こゑりて胸むねを  
 吐はきと揚あげり声こゑ山谷やま小御音こごねとお殺ころす勢いきほ大軍おほぐん小異こゝろる山賊やまあし小食こく  
 胸むねを潰つぶして戦たたかんとする心こゝろ北きたのへ脱だれは逃に去はらんと相あ擇らむを待まち設しやう  
 たる弘元ひろもとの男おとこ率りつ小洞こほら口くち小立こたて塞さす一箇ひとつも漏もれは破やぶれは駭おどけは引ひ久ひさ下した南みなみの  
 小賊せうあし亦また逃にげは前まへのへ高たかくは斫き伏ふられは脱だれは稀まれは引ひ久ひさ下した南みなみの  
 小賊せうあし亦また討うち捕とるは後のち詰つめ甚し麼やと次ついでの卷まき小解せうげ分わるは聽き録ろく也なり。

近世説美少年録第一輯卷之一終



